

## 重要化した日本の地位

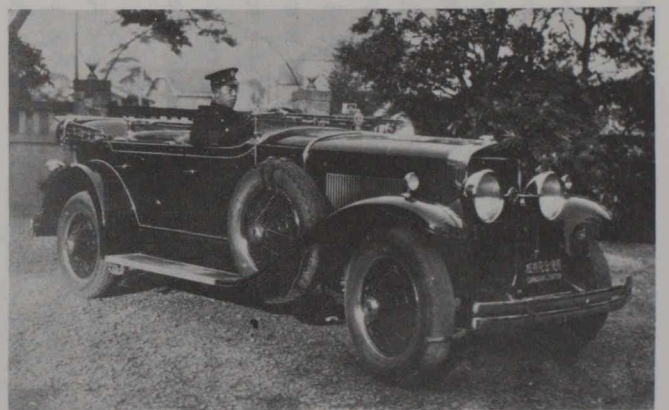
一九二八年当時、日加間に直接的な外交関係を樹立することは、多くの点で全く意義のあることであった。両国間の貿易総額は四千六百万ドルに迫り、日本はカナダにとってアメリカ、イギリスに次ぐ第三の輸出相手国になった。一方日本にとっても、カナダは第六番目に重要な取引先となった（ただしカナダからの輸入額は三千万ドルは日本の輸入総額のわずかに三・〇三%にすぎなかったが）。日本からカナダへの移民も、東京にカナダの外交事務所がなかったため長いこと不便な思いをしてきたが、公使館が設置されれば、移民を希望する人々の扱ひもスムーズに行く……。



信任状捧呈の日に、左から、カーウッド2等書記官、キーンリーサイド1等書記官、マーラー公使、ラングリー商務官。

国際的な観点から見ると、一九二〇年代の日本が世界の大国といわぬまでも、アジアおよび太平洋地域の一大強国であることは明らかだった。キング首相は、日本の意見が国際問題の分野でますます強い力をもつことを予想し、将来、戦争と平和に関する大問題はロンドン、パリ、ワシントンそして東京で決定されるだろうと断言した。「これら四大国の関心を、カナダにとって重要な問題に向けさせる」には、四大国のいずれとも外交関係を結んでおくのが賢明である、と彼は考えたのだった。さまざまな国との外交関係の樹立は、若い国カナダの成熟過程における重要な一歩でもあった。海外のカナダ公使館は「カナダが人的にも物的にも他の域内諸国に劣らない優秀な外交活動を展開する能力を有すること」を、世界に向かつて証明することになると、キング首相は書いている。

東京に公使館を開設という発表がなされるや、初代公使を誰にすべきかについて、早速首相に進言する者が多数現われた。キング首相はなかなか断を下さなかったが、結局、モントリオール出身の実業家ジョージ・ステイブンス（一八六六―一九四二）が適任だと考えるに至った。ステイブンスという人物は、第一次大戦中に国家に大いに貢献をなし、戦後も活躍した人物だが、諸外国語に堪能な点もあって、フランスが主導した一九二三年―一九三五年の「S.A.A.R.委員会」にイギリス推薦の委員として大いにその外交的手腕を発揮していた。難しい仏独の対立的要求を非常に手際よく調停したので、議長（一九二四―一九二六）に選ばれた



カナダ公使館開設当時の公用車。

くらいだ。ところが、キング首相が実際にステイブンスに駐日初代公使就任を依頼すると、国外での任務がこれ以上長くすることにステイブンス夫人が強く反対し、ステイブンスはしぶしぶながらキング首相の申し出を断らざるを得なかった。

### マーラー、公使赴任を快諾

次に首相が考えたのは、かつての政治上の同志ハーバート・マーラー（一八七六―一九四〇）であった。モントリオールで名声の高い「W・M、D・E、H・M マーラー法律事務所」の共同経営者であったマーラーは、一九二一年にモントリオールの選挙区から下院議員に選出されていた。キング首相は、一九二五年に彼を無任所大臣として内閣に迎え入れた。入閣して間もなく、その年に行われた総選挙でマーラーは落選してしまっただが、議

員の地位を離れてからも相変わらず政治的野心を持ち続け、キング首相がケベック州の政治戦略を考える時、よくマーラーに意見を求めた。

首相はマーラーを、少々ユーモアに欠けるくらいはあるが、粘り強く、聡明で、誠実な人物だとして、高く評価していた。初代公使のポストをステイブンスがしぶしぶ断ったとき、首相はそれをマーラーに依頼した。一九二九年一月一日のことである。政治的野心を犠牲にしないためにもマーラーは断るのではないかと、キング首相の予想に反して、マーラーは非常な熱意をもってこれを受諾した。キング首相は大変喜び、日記にマーラーのことを「立派な公使になるだろう。東洋で最初のカナダ公使館を担う人物としてはまさにうってつけだ」と記している。

マーラーが公使の任務に熱意を抱いたことは明らかだが、他方で自己の政治的野心を捨てたわけではなかった。彼は、もし自分が望んだときには次期総選挙に立候補して差支えないとの約束を、キング首相から取りつけていたのだった。

キング首相が驚いたことには、マーラーは公使としての給料を貰わずともよいと申し出た。このことはマーラーの熱意と裕福さを物語るものであったが、同時にカナダの外交活動の若さ（と未熟さ）を反映するものでもあった。当然のことながら、キング首相はこの申し出を拒否した。外交官の活動としてはあり得ぬことだったからだ。首相はマーラーに在日公使としての給料一万ドル、手当一万二千ドル、その他に公用車代三千ドルを支給すると告げた。